

オープンサイエンスの深化と推進に関する検討委員会
(第24期・第7回)

議事録

1. 日時 令和元年6月24日(月) 16:00-18:00

2. 会場 日本学術会議6階6-A(1)会議室

出席者(五十音順、敬称略): 安達 淳、喜連川 優、久留島典子、高木 利久
(リモート参加)、林 和弘、引原 隆士、溝端 佐登史、村山 泰啓、
渡辺美代子
オブザーバ参加: 川合眞紀(自然科学研究機構・分子化学研究所)、
山地 一禎(NII)

3. 議題

1. 情報提供1 (溝端委員)
2. 情報提供2 (川合眞紀 自然科学研究機構分子化学研究所所長)
3. その他

4. 配布資料

- 資料1 経済学におけるオープンサイエンス (溝端委員)
資料2 日本化学会オープンサイエンスの取り組み (川合先生)
資料3 学協会の今(川合先生)

5. 議事

1. (情報提供1) 溝端委員から、資料1に基づき経済学におけるオープンサイエンスの動向について報告があり、その後の意見交換を含め主な点は以下の通り:
 - 経済学では、米国でのデータ公開が進み、研究も進めやすく成果も群を抜いて出ている。アジア諸国でもこのようなスタイルが進む中で日本が最も遅れている。
 - 論文はまずディスカッションペーパーを公開し、論文として完成させるというやり方が普通となっている。
 - データの大部分は公的データである。その他は行政資料等になる。アクセスはオンサイトの利用施設からである。
 - データに関する課題は、経年データが極めて有効であること、科研等で作ったデータの継続性維持が難しいこと、人材不足の問題、民間のビッグデータの利用可能性などである。また、拠点を作ることが重要である。
2. (情報提供2) 川合所長から、資料2および3に基づき、日本化学会を中心としたオープンサイエンスの動きに関する報告があり、その後の意見交換も含めた主な点

は以下の通り。

- 化学では、CAS を中心に長く論文検索、化学物質の登録、X 線結晶構造データなどが整備され利用されてきた。
 - 最近では NIMS を中心にしてマテリアルズ・インフォマティクスのような方向性も主唱されている。
 - 化学会は学会の国際連携のもとで ChemRxiv へ共同オーナーとして参加することにした。
 - 化学での論文投稿やプレプリントサーバ利用の動向について説明があった。
3. (その他) 今後の取りまとめ方について意見交換し、次回開催日時は調整して決定することとなった。

以上